

能勢朝次君著「能樂源流考」に對する授賞審査要旨

本書は、能樂の起源及び沿革を研究したるものにして、其の包含する時代は、上は奈良朝より下は慶長初年に及び、三編より成り、附するに田樂考一編を以てせり。

第一篇は「平安時代の猿樂」と題し、奈良時代に關する考察をも之に要約せり。四章に分つ。第一章に於ては、主として平安時代の貴族的猿樂を説き、支那の散樂との關係を論じ、第二章に於ては、専ら平安時代の賤民猿樂の發生・藝態・演者等を考究し、第三章に於ては、咒禁師と咒師との史的關係を論述し、咒師の由來に關する詳細なる考察を試み、更に遡つては唐散樂よりの因由を論究し、第四章に於ては、翁猿樂の發生及び原始と其の變遷とを詳論し、且つ翁の舞樂發生說に對する疑問を提供して先進者の所説を批判する所あり。

第二篇は「鎌倉吉野時代の猿樂」と題し、此の時代に於ける大和及び丹波の猿樂より、猿樂能と田樂能及び延年能との史的關係、猿樂と伎樂との原由關係に亘りて、精細なる考證を進めたり。即ち第一章「大和猿樂考」に於ては、興福寺・春日神社・法隆寺・圓滿井座等大和の寺社關係の猿樂を取扱ひ且つ薪猿樂の起源を考へ、第二章「丹波猿樂考」に於ては、本座・新座・法成寺座等・猿樂の發生・分派・活動・咒師との關係を考究し、又殿上侍臣及び武士の猿樂に就きて記述せり。第三章は「能の發生と

その展開」を細説し、貞和年間の猿樂能・田樂能を敘述して、巫女の猿樂・禰宜の田樂・囃子等より延年風流・狂言風流等に渉る吟味を盡くし、第四章「伎樂と猿樂との關係」に於て、猿樂を伎樂の末葉なりとせる先行諸説を批判して、之に關する疑義を提示せり。

第三篇は「室町時代の猿樂」と題し敘述精細を極む。全篇三部十二章に分れたり。第一部は六章に分ちて大和・山城・近江・丹波・伊勢・攝津の近畿六州に亘れる猿樂を地方的に考察し、第二部は四章に分ちて、民衆的なる勸進猿樂及び素人所演の手猿樂を始め、猿樂と宮庭・武家・寺社との交渉を敘述し、第三部は演能曲目考と謠曲作者考との二章に分てり。第一章、「大和猿樂考」には、金春・金剛・寶生・觀世等重要なる諸座及び傍系の猿樂の沿革を明かにし、第二章「宇治猿樂考」、第三章「近江猿樂考」に次ぎて、第四章「丹波猿樂考」に於ては、矢田猿樂・梅若猿樂等を詳かにし、第五章「伊勢猿樂考」に於ては、その起原變遷及び特に咒師との關係を究め、第六章「攝津猿樂考」に及べり。第七章「勸進猿樂考」は、民衆の猿樂翫賞より勸進能の發生せる來由を説き、勸進能に於ける田樂と猿樂との隆替を述べて、京都・河原兩度の勸進猿樂を始め以後近畿各地のそれに及べり。第八章「手猿樂考」に於ては手猿樂の意義を論じ、武士・公家・僧侶及び庶民の素人猿樂を記し、又その職業化の徑路を説き、第九章「寺社武家と猿樂との交渉」に於ては、先づ寺社と猿樂との交渉並にその推移を述べ、特に興福寺本願寺等の如き寺院の猿樂演能の次第を敘し、更に進んで武家と猿樂との交渉を考究して、武家

が猿樂保護者たるに至りし來歴より猿樂が式樂として發展せる始末を説述し、猿樂者の所得を稽查したる後、第十章「宮廷猿樂考」に於ては、仙洞並に禁裡に於る猿樂御賞翫に關して歷代の通觀を悉くせり。第十一章「演能曲目考」は主として永享慶長間三百九十三回に上れる年代的演能曲目表と、その年次回數を對照したる統計表とより成り、演能史に關する資料を收む。第十二章の謠曲作者考は、資料と考察との二節を主とし、二者の關係を檢討し、且つ卷尾に謠曲作者考曲名索引を附して索出に便にせり。

附篇たる田樂考は、平安時代及び鎌倉吉野時代の二章に分ち、田樂の原始と沿革とを精敍したるものなり。

以上を能樂源流考の要項となす。今之を通觀するに、著者は、本書に於て能樂の起原を研究せること極めて精到にして、時代と地方とに分ちて演戲場及び演戲者の地位階級種別流派團體等より、賞翫者保護者等の方面に亘り、又曲目作者等の上にも及び、資料の博搜を悉くして、之に史的觀察を下したる點、其の努力の甚だ多大なるを認む。

猿樂の原委に關しては、唐代散樂の影響、伎樂との關係、田樂との接觸、咒師との交渉等重要なる事項を檢討し、能く前人の所説を批判して能樂史上に種々の新問題を提起し、更に從來の考察に一步を進めんとせり。殊に著者の最も意を致したる室町時代及び其前後の猿樂につきましては、各地の社寺文

庫舊家藏書家等より新に發見したる史料頗る豊富にして、之を普く學界に提供したるの功績は著しきものあり。是れ忠實に既知の記録を精査して能樂史實を剖析して將來の學徒の考察に資益したるの勞力と共に、併せて之を多とせざるべからず。唯、本書の所論を見るに、到る所材料の精察と事實の解析との優れたるに比すれば、概して文化史的及び一般演劇史的の洞察に乏しく、且つ演戲及び音樂の技術的方面に關する觀察も未だ十分なりとなす能はず。然りと雖も、これ著者の卓越せる長所を減損すべきにあらずして、其の研究の堅實と其の論斷の妥當とを以てして、其の業績は今後能樂の源泉を究め細流を探らんとする者に對して貢獻する所甚だ多く、此著が永く有用缺く可らざる典據たるべきは疑を容れざるなり。